



文化遺産特別演習 報告書

第2号



松島にて

北海学園大学人文学部



文化遺産特別演習 報告書

第2号

目次

令和4年度 文化遺産特別演習 報告 引率教員 鈴木 英之・森川 慎也……………	12
防災を考える 今井 花音 ……………	14
世界遺産、震災遺構保存の意味（価値） 岡田 夏音 ……………	16
石巻市を訪れて―東日本大震災からの復興と伝承― 佐藤 鈴夏 ……………	18
文化遺産特別演習を通して学んだこと・感じたこと 高橋 花 ……………	20
「心象世界」の体験 山下 泰聖 ……………	22
文化遺産特別演習～東北演習を通して～ 我妻 凌芽 ……………	25
被災地 鶴住居町と平泉 中尊寺での所見 魚住 将太 ……………	27
世界遺産と震災遺構を訪れて 四戸 里美 ……………	30
文化遺産特別演習 伊東 璃菜 ……………	32
文化遺産特別演習～東北演習を通して～ 五十嵐博紀 ……………	34
とおの物語記念館を訪れて 藤井 汐里 ……………	36
宮沢賢治～記念館・童話村～ 船木 奏音 ……………	38
継承と情報の伝え方を考える 高山 礼海 ……………	40
東日本大地震の記憶と教訓 高野 魁人 ……………	43
文化遺産特別演習を通して 大西 菜月 ……………	45



洞爺駅



札幌～洞爺
～函館北斗



入江貝塚



竪穴住居(入江貝塚)



高砂貝塚



函館北斗～八戸
～釜石～花巻



是川縄文館



4日間お世話になったバス。八戸駅から出発。



是川縄文館内(ガイドの方の説明を受ける)



田老第二防潮堤(宮古市)



合掌土偶(是川縄文館)

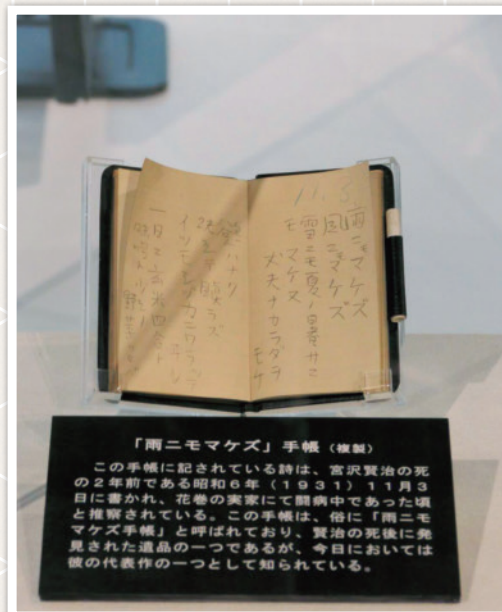
3日目
9月14日
花巻～遠野～
陸前高田～平泉



宮沢賢治記念館



宮沢記念館前にて



「雨ニモマケズ」手帳(複製)



開館40周年



賢治の「芸術」コーナー



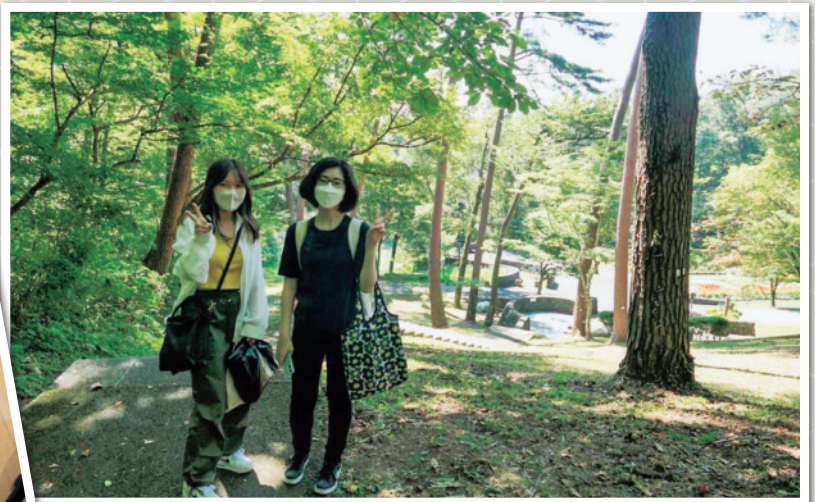
宮沢賢治童話村



白鳥の停車場(童話村)



宮沢賢治イーハトーブ館



宮沢記念館からボランの広場へ



セロ弾きのゴーシュ



賢治の世界



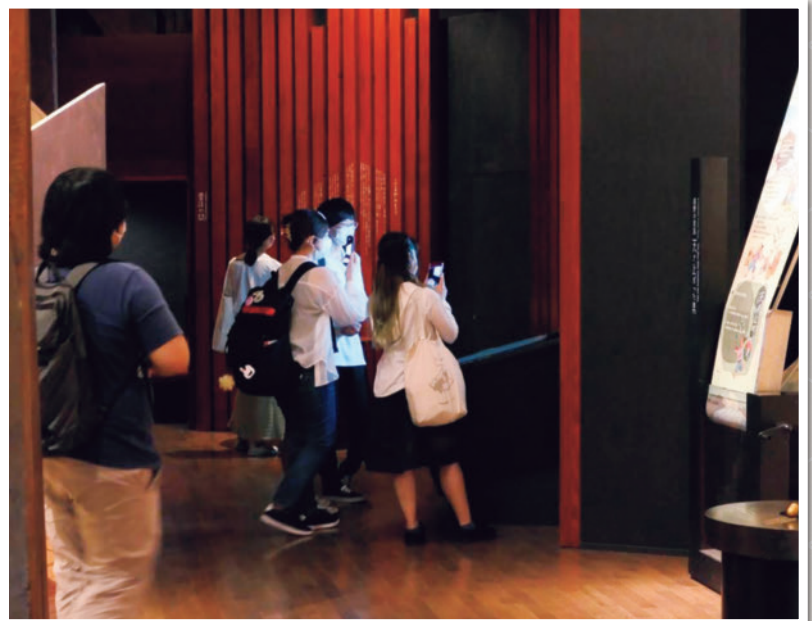
花巻～遠野～
陸前高田～平泉



右端は添乗員の佐々木さん



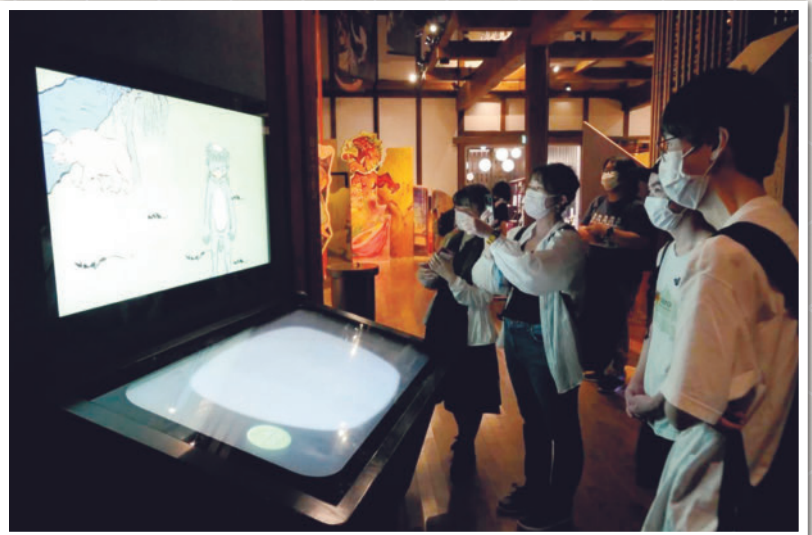
とこの物語の館



とこの物語の館内



柳田國男像



映像で昔話を作る(とこの物語の館)



遠野市立博物館



高田松原津波復興記念公園



高田松原の再生に向けて



陸前高田 奇跡の一本松



東日本大震災津波伝承館(いわてTSUNAMIメモリアル)の展示



終日平泉



毛越寺の浄土庭園



毛越寺前にて



平泉・金色堂



毛越寺秋まつりの撮影中にNHKの取材を受けた学生たち



平泉で宿泊した武蔵坊にて



平泉～石巻
～松島



石巻南浜津波復興祈念公園にて



ガイドの方から石巻の被災状況について説明を受ける



震災遺構 門脇小学校



みやぎ東日本大震災津波伝承館



松島



みやぎ東日本大震災津波伝承館内



瑞巖寺五大堂



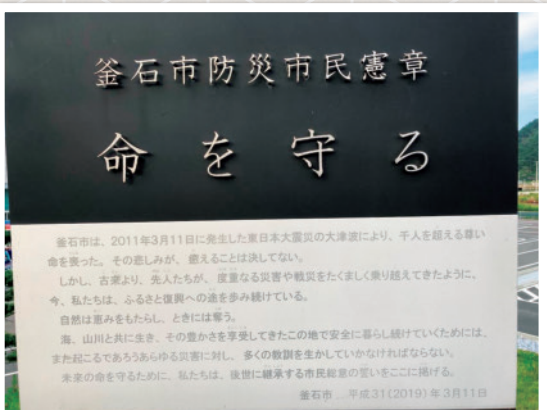
震災遺構 たろう観光ホテル



釜石祈りのパーク



小丘の上にある記念碑の天辺は津波到達の高さ



釜石市防災市民憲章



軽井住居小学校(震災後に高台に移された)



釜石市いのちをつなぐ未来館内

令和4年度 文化遺産特別演習 報告

引率教員 鈴木 英之・森川 慎也

文化遺産特別演習は、日本にある文化遺産を実際に訪れることで、日本と世界との関係性を考える現地体験型アクティブ・ラーニング形式の特別演習として開講されました。今回の行き先は「東北地方」です。世界遺産・平泉（岩手）を中心に、宮沢賢治ゆかりの地（花巻）、遠野、東日本大震災の被災地、入江・高砂貝塚（洞爺）の縄文遺跡群などを、9月12日（月）～9月16日（金）の4泊5日の日程で巡りました。

本演習は令和元年度に開講されましたが、新型コロナウイルスの出現と感染拡大により、令和2年、令和3年と実施が見送られました。令和4年度は、行動制限が解除されてきたことを受けて実施が検討され、4月にガイダンスを行い、履修者を募りました。ただし依然として感染流行は続いていたため、状況を見ながら6月に現地研修の可否を判断し、7月・9月に教員による講義と学生の発表からなる事前学習を集中して行いました。

8月初めの時点では、21名の参加希望者がいましたが、感染リスクや感染時の対処方針を説明したうえで最終的な参加意思を確認した結果、15名が参加することになりました。辞退者の中には、ずっと演習が実施されず残念に思っていた、今年こそは参加したかったが感染リスクを考えて泣く泣く取りやめたという4年生もいました。コロナさえなければと本当にうらめしく思います。

現地研修については、旅行会社と繰り返し打ち合わせを行い、3～4人部屋での宿泊を主に1人部屋にすること、バスの換気を徹底すること、感染時の保険の加入など、十分な対策をとったうえで実施することになりました。また大学においても、学生が感染した場合の隔離方法や、教員感染時のバックアップ体制などを整え、何とか実施にこぎ着けることができました。

参加した学生は次の通りです。内訳は、1部日文9名、2部日文4名、2部英米2名でした。

今井 花音・岡田 夏音・佐藤 鈴夏・高橋 花・山下 泰聖・我妻 凌芽・魚住 将太・
四戸 里美・伊東 璃菜・五十嵐 博紀・藤井 汐里・舩木 奏音・高山 礼海・
高野 魁人・大西 菜月

コロナ禍においても参加するくらいですから、意欲のある学生が多く、事前学習・現地研修ともに充実したものとなりました。なかには飛行機も新幹線に乗るのも初めて、道外に出ること自体が初めてという学生もおり、北海道から外へと目を向ける良い機会になったと思われまます。また学年も様々でしたが、コロナ禍で交流も減っていたこともあり、上級生とともに行動することは楽しかった、との声も聞きました。

旅程は次の通りです。

- 9月12日（月） 札幌駅より鉄道にて入江・高砂貝塚へ。新函館北斗泊。
- 9月13日（火） 新函館北斗から新幹線で八戸に移動。貸切バスにて是川縄文館～釜石市いのちをつなぐ未来館～花巻泊
- 9月14日（水） 花巻～宮沢賢治記念館～とおの物語の館～陸前高田奇跡の一本松～平泉泊
- 9月15日（木） 世界遺産・平泉現地踏査。終日自由行動。平泉泊。
- 9月16日（金） 石巻・大震災まなびの案内～松島～仙台空港。空路にて帰札。

東北地方は公共交通機関の利用が難しく、旅程のほとんどが貸切バスでの長距離移動になりました。行きづらい場所も多く含まれており、個人では中々回ることのできない充実した旅程となりました。

本書に掲載された学生の報告を見ると、それぞれ実地研修で感じ取るものが多かったことがわかります。学生たちは各々の関心に従い、宮沢賢治記念館では原稿や賢治ゆかりの文物にふれて賢治の創作活動について考え、遠野では語り部の昔話に聞き入り、平泉では自分の足で歩くことで、現世の浄土として設計された空間を体験するなどしていました。

東日本大震災関連の遺構を見学した際には、少なからぬショックを受けた学生もいました。震災の起きた2011年3月当時、学生たちの多くは小学生であり、震災をもちろん知っているし、事前学習で概要を調べてもいたが、実感が湧かないというのが実際のところだったと思います。ですが、ボランティア諸氏の説明を現地で聞き、震災遺構や、津波により流され何もなくなった跡地に整備された広大な公園、真新しい街並みを見ることで、その怖さと悲しさの一端を自分のものとして感じていたようでした。

これらは、まさに本演習のテーマである「歩く、見る、聞く」を通じて得られた知見と言えるでしょう。こうした学生の声につきましては、本報告書をぜひご覧ください。

最後になりましたが、今回の研修旅行をコーディネートし、コロナ禍において様々な調整をしていただきました日本旅行北海道札幌支店の片桐圭一さん、また宿泊先や専用バス、現地でのガイドなど細部に至るまで綿密にご手配いただきました添乗員の佐々木麻奈美さんに厚く御礼申し上げます。

防災を考える

1 部日本文化学科 1 年 2722111 今井 花音

はじめに

文化遺産特別演習で東北地方へ行くと知ったとき、筆者の頭に一番に浮かんだテーマは、東日本大震災だった。東日本大震災では、巨大地震による家屋の崩壊、津波、火災、原子力発電所での被害など、多くの災害が起こった。その被害の状況は、テレビやラジオ、インターネットを通じて、日本国民のみならず世界中の人々に伝わり、大きな衝撃を与えた。このような悲惨な出来事がもう 1 度起こらない様この震災についてより深く知るべく、筆者は、津波の被害を受けた岩手県釜石市にある、「いのちをつなぐ未来館」を訪れた。この施設は、震災の出来事や教訓とすべきことを伝えるとともに災害から未来の命を守るための防災学習を推進する、震災伝承施設である⁽¹⁾。本稿では、この施設で紹介されている東日本大震災当時の実話⁽²⁾をもとに、津波による被害が大きくなった原因と、そこからわかる「一人一人の防災への意識の重要性」について述べていく。

避難所と避難場所の違い

今回訪れた「いのちをつなぐ未来館」と隣接する、「釜石祈りのパーク」の場所には、震災前までは「釜石市鶴住居地区防災センター（以下『防災センター』という）」が建っていた。この防災センターは、地震などの災害が収まった後、あらゆる理由で家に帰ることができなくなった人が中長期の避難生活をおくる場所、いわゆる「拠点避難所（以下『避難所』という）」であった。対して、実際に地震などの災害が起きた際、まず一番に向かうべきである場所のことは、「緊急避難場所（以下『避難場所』という）」と呼ぶ。この 2 つの違いを認識していない人は、沢山いる。筆者は演習後、家族に対して、もしも今近所の川が氾濫して避難しなければならなくなったら、まずどこに避難すればいいのか訊ねてみた。すると家族全員、避難場所である近所の小学校の名前をあげた。しかしこの小学校は、家よりも川から近く、かえって危険な場所にあった。実際に東日本大震災でも、避難所と避難場所の違いをあまり認識していなかったことから、196 名もの市民が避難所である防災センターへ避難した。結果、防災センターでの津波による死者数は 162 名にもものぼった。釜石市は、被害の大きかった岩手県の中でも、死者数は 2 番目、行方不明者数は 3 番目に多く⁽³⁾、市内の犠牲者のうち約 5 分の 1 もの人数が、この防災センターで亡くなっていた。これらのことから、いかに防災センターでの被害が大きかったかがわかる。避難所と避難場所の認識の違いは、防災センターに避難した人が多かった原因であると同時に、被害状況をより大きくした原因でもあると考えられる。

練習用の緊急避難場所

さらに、鶴住居地区では津波避難訓練をする際、この防災センターを避難場所として訓練を

行っていた。しかしこれは、訓練の参加率を上げるためなどの理由からこの防災センターが使用されていただけであって、訓練時のみ使用する、いわば「練習用の緊急避難場所」であった。本当の避難場所は高台の屋外にあった。津波避難訓練は、東日本大震災直前の2011年（平成23年）3月3日にも行われており、この時も防災センターに避難した人がいた。前述した避難所と避難場所の解釈の違いに加えて、実際の避難場所ではない場所を避難場所として訓練で使用していたことも、東日本大震災当時防災センターに避難した人が多かった原因の1つであると考えられる。

予測を超える高さの津波

とはいえ、岩手県が作成したハザードマップ（津波浸水予測図）では、防災センターは浸水予測範囲から外れていた。ハザードマップとは、自然災害による被害の軽減や防災対策に使用する目的で、被災想定区域や避難場所・避難経路などの防災関係施設の位置などを表示した地図であり⁽⁴⁾、ある一定の高さの津波が来るという想定条件で作られたものである。しかし、東日本大震災は、ハザードマップ作成時に予想された津波の高さを大幅に上回った。鶴住居地区では、この予測を超える津波も起こりえるということが周知されておらず、ハザードマップで大丈夫なら安全であると認識されていた。このことが、練習用の避難場所として防災センターが使用されることになった原因であったという。これらのことから、ハザードマップを信用しすぎるのではなく、万が一のことを考えたうえで予測、行動することが重要であることがわかる。

自ら防災について考えることの重要性

避難所、避難場所、避難訓練、ハザードマップなど、国や地域が行っている防災はいくつかある。しかし、一人一人が防災について、1からよく考えたことはあるのだろうか。近所の避難所はどこなのか、緊急時の避難場所はどこなのか、今までの避難訓練は本当に正しいのか、予測を超える災害が来た場合どうしたらよいのか。防災センターでの被害とその原因から、世間一般的にいわれる「防災」よりも1歩先を、一人一人が考えたうえで対策することが重要であることがわかる。自身の防災について1人でも多くの人を考えなおすことによって、もしもの時に、1人でも多くの人を救うことができると考えられる。

[参考文献]

-
- (1) うのすまい・トモス「いのちをつなぐ未来館」<https://unosumai-tomosu.jp/tsunami-memorial-hall/>（2022年11月30日閲覧）
 - (2) 「いのちをつなぐ未来館」岩手県釜石市鶴住居町（2022年9月13日訪問時のお話）
 - (3) 岩手県庁「岩手震災津波アーカイブ 希望」<http://iwate-archive.pref.iwate.jp/higai/>（2022年11月30日閲覧）
 - (4) 国土交通省国土地理院「ハザードマップ」<https://www.gsi.go.jp/hokkaido/bousai-hazard-hazard.htm>（2022年11月30日閲覧）

世界遺産、震災遺構保存の意味(価値)

1 部日本文化学科 1 年 2722123 岡田 夏音

今回私は「実際に目で見てしか得られないものを学ぶ」ことを目標に今回の演習に参加した。実をいうと北海道から出て遺産をめぐるのが生まれて初めてで、内心は不安と好奇心が混ざりあっていた。東北の世界遺産、震災遺構を見て回ってきて、今回報告書を作るにあたり、このようなテーマを設定した。私自身「実物を残しておく意味」がこの研修に行く前まではあまり実感できていなかったからだ。今の時代、ありとあらゆる情報がインターネット上でやりとりできるうえ、そのほうが便利であるという考えを持っていた。わざわざ古いものを何度も修復して残しておく意味はあるのか。その疑問を解決するべく4泊5日の研修へ向かった。

まず初めに訪れたのは洞爺にある入江貝塚・高砂貝塚だ。入江には縄文時代の竪穴式住居、高砂には発掘した当時の姿が展示されており、一見して少しくぼ地の多い公園に見えた。しかし中へ入ってみると、おそらく発掘した方々が再現したのであろう竪穴式住居の骨組み、また壁のあるものがあつた。一方、高砂貝塚には出土品なのであろう大量の貝殻が白く地面を覆っていた。今自分が見ていたものは4000年前もの人々の生きた証であるのだと考えると不思議に思えた。

2日目は青森県の是川縄文館へ見学へ向かった。前日に見学した入江遺跡や高砂貝塚のような場所からこれらの土器が発見されたこと、幾万年もの時を経ていま私たちの目の前に再現・修復されていることに、時の多さのようなものを感じた。そして現代科学の進歩、創設者の意思に感心・感謝した。この縄文土器がもとに、私たちの生活で普通に親しまれている日常の様々なものが生まれたのだと思うと計り知れない歴史を感じた。

次にこの研修最初の震災にかかわる施設、岩手県釜石市のいのちをつなぐ未来館へ向かう。当時被災した建物の写真や、避難することができた子供たちの証言を見ながら、ガイドさんのお話を聞いて、胸が苦しくなったのを覚えている。些細な油断、そして「当たり前」と思っていた出来事が、あっけなくこのような事態となってしまったかと思うと、いかに日ごろの避難訓練やいざという時への備えが必要なのかを思い知らされた気分だった。

3日目。研修の折り返し地点の日に訪れたのは岩手県陸前高田市の奇跡の一本松だ。震災当時、私の中で一番震災のシンボルとして印象に残っているものだった。津波の伝承施設であるいわてTSUNAMIメモリアルへ近づくと、建物が少なく、視界がとても開けていた。メモリアルには、当時救助に携わった人々の言葉が生々しくつづられていた。自分はその時「ダメだろ…」としか言いようがなく、今見ている、歪んだ消防車や人々の証言が、本当に現実で起こったことであることを信じたくなかった。今見ている資料が本当に現実で起こった出来事であることが受け入れられなかった。

4日目は岩手県平泉町で自由散策に興じた。私が訪れたのは中尊寺金色堂、無量光院跡、毛越寺。教科書で何度となく見た世界遺産を訪れるとあって期待が膨らんだ。金色堂に到着するまでの道中、小さな祠からお寺跡まで様々な建物が残っていた。それらの中には、修復工事の

時に剥がしきれなかったものなのか、それとも年月の経過で色褪せたのかはわからない、色の薄れた千社札が見受けられた。千社札とは、人々がその場所へ訪れたことを残す、今でいう記念のようなものだ。これがもし、年月によって色が薄れたものなのだとしたら、時代の変遷を深く感じる。毛越寺、無量光院跡は金色堂よりかは人が少なく、広々と跡が残っていた。端のほうではボランティアの方々が発掘調査をしているような姿が見受けられ、いまだに発見が埋まっているのだと思うと時代の濃厚さをより感じた。

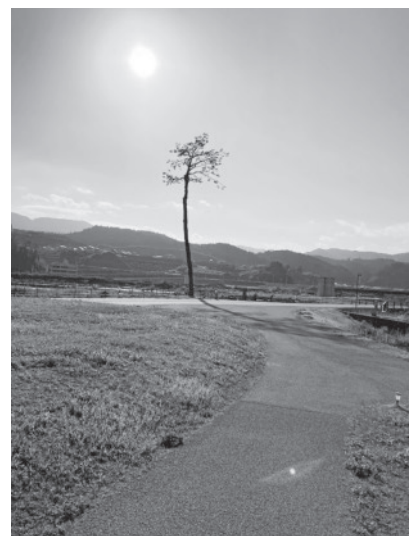
最終日は石巻市を訪れた。津波のあった地域にはまだ復興途中の名残のように建物がなくがらんとしており、震災遺構として当時の小学校が残されていた。3階のところまで塗装がはがれている箇所があり、津波の高さが恐ろしさとなって胸に迫ってきた。震災当時、津波は最大で6.9メートル、およそ7メートルもの高さのものが迫ってきたのだそう。

ここまで様々な震災遺構、世界遺産を初めて目にしてきたのだが、どれも教科書で見ただけでは伝わらない恐ろしさ、畏怖、荘厳さを持っていた。今の時代、インターネットですべてが解決するのは確かだが、その何割を、私たちは「真実」として本当に信じることができるだろうか。私は実物を残すことは、経験のない人にとっても「間接的な経験」として記憶に生々しく残すことができるのではないかと思う。事実、実際に震災遺構を目の当たりにしなければ、私は今のように災害の恐ろしさを身に迫って思い出したり考え込むことはなかつただろう。災害はいつも突然やってきて、私たち人間には対処のしようがない。ならば私たちのできることは何か。出来事を後世へ、少しでも色あせることなく伝えることだ。

震災遺構を訪ねるまで、義務教育、高等学校で行ってきた避難訓練をそこまで重要に思ったことはなかつた。亡くなった方々も、今の私のような心情だったのであろう。まさか自分の住む町の大半が失われるなど現実感がなさすぎる。今この土地に住んでいても未だにそう思う。しかし、明日はわが身なのだ。今回の研修で学校教育内での避難訓練指導がいかに大切かが切実に身に迫ってきた。「本番じゃないから」で終わらせてはならない。

震災遺構があることで、私たちは過去に起きた出来事を生々しく追体験することができる。そこにあるのはフィクションではなく、現実で起こった出来事であるからだ。SNS、インターネットがいかにフィクションにあふれているかは私たちの世代が一番よくわかっているはずだ。この現代にこそ、本物の現実を目の当たりにできる代物が必要なのである。

今まで語ってきた内容は、世界遺産にも当てはまる。私たちの祖先が営んできた生活の様子、三大藤原氏が守ってきた信仰の土地、それをデータの海に変えた時、彼らの当時の意志の本質は果たして報われるのであろうか。作品を作った当時の人々の思い・感動は伝えきれぬだろうか。今の私は、それは難しいのではと考える。目の前にある実物の美しさ、荘厳さは、やはり画面一枚では伝えきれない。ぜひ一度、足を運んでみてほしい。



奇跡の一本松

石巻市を訪れて—東日本大震災からの復興と伝承—

1 部日本文化学科 1 年 2722150 佐藤 鈴夏

1. はじめに

私は文化遺産特別演習の事前グループ発表で、東日本大震災による石巻市の被害について発表を行った。私はグループ発表を行うまでは、石巻市がどこにありどのような被害を受けたのか全く知らなかった。そこで、発表資料を作成する際に、石巻市のホームページに掲載されている震災報告書を読み、石巻市の具体的な被害について知ることにした。その結果、調べたことや事前グループ発表を通して石巻市という街に興味を持ち、現地に足を運んで、実際に自分の目で見て、石巻市と震災について学びたいと考えたのが、石巻市を報告書の題材にしたきっかけである。本稿では、石巻市で訪れた場所をもとに石巻市と震災について記述している。

2. 石巻南浜津波復興祈念公園

私たちは、はじめに石巻南浜津波復興祈念公園を訪れた。公園がある南浜地区は津波の襲来とその後に発生した火災の延焼により 500 人以上の人々が亡くなっている。公園は、亡くなった人々を追悼する場所として、また震災の記憶と教訓を後世に伝承し、復興への強い意志を国内外に向けて示すことを目的に設備されている。公園のデザインコンセプトは、南浜地区における集落の成り立ちの歴史や風土を示すかつての自然環境である「浜」と、震災前に蓄積された半世紀の思いや記憶を示す「街」の要素を取り入れたデザインであり、追悼と伝承の祈念公園となっている。公園内には、慰霊碑や津波伝承館の他に、池や木々が多く植えられており、自然を強く感じる事が出来た。また、広場や丘などの広大な土地があり、石巻湾から香る磯の香りと豊かな空気を吸い、落ち着いた雰囲気を感じられる場所であった。

3. みやぎ東日本大震災津波伝承館

みやぎ東日本大震災津波伝承館は石巻南浜津波復興祈念公園の敷地内にある施設である。伝承館は、東日本大震災の悲しみと混乱を繰り返さないために、震災の記憶と教訓を永く後世に伝え継ぐこと、被災地の再生と復興に向けて、人々と地域が力を合わせて歩み続けることを責務とし、未来への誓いを新たにするための場として設備されている。伝承館の特徴は、その見た目である。建物は屋内直径 40 メートルの正円形で、屋根は林立するランダムな細い柱で支えられ、建物周辺に植えられた樹林が成長した際に連続した空間となるようなデザインになっている。外壁は全方位を見渡せるような透明のガラス張りである。そして、一番の特徴は、斜めに建設された屋根である。建物の一番高い北側の屋根は、高さ 6.9 メートルで、この土地を襲った津波が停滞した時の高さとなっている。これにより、伝承館を訪れた人は、津波がどの高さまで押し寄せたのか体験することが出来るのである。私も実際に屋根の下に立ってみたところ、その高さに驚いた。文字で 6.9 メートルと聞いてもピンと来ないかもしれないが、実際

に高さを表すものがあると、その高さや威力を体感できた。館内には、東日本大震災による宮城県の被害内容、死者・行方不明者数、被災者の声などをまとめたパネルの展示があり、東日本大震災について詳しく知らなかった私でも、十分な知識を得ることが出来た。特に、被災者の声をまとめたパネルには、震災当時のリアルな言葉や情景が書かれており、その悲惨さを感じる事が出来た。

4. 石巻市の取り組み

石巻市では、石巻南浜津波復興祈念公園やみやぎ東日本大震災津波伝承館などの震災伝承施設の他に、震災被害を抑えるために様々な取り組みを行っている。街の電柱には、浸水範囲や避難方向を示す防災サインが取り付けられており、今後同じような大震災が起きた際の避難の目印となっている。また、市では震災を忘れないための震災跡地・歴史散策ツアーを行っている。石巻市では、震災で倒壊した建物を記憶や教訓のために、取り壊さず保存しており、ツアー参加者はそれを見学するのである。震災の被害を受けた建物を実際に見ることによって、震災の恐ろしさを知り、防災意識の向上につなげていくのである。

5. おわりに

現地足を運んだことによって、体感での津波の高さや被災者の声など、ネットで調べただけでは知ることが出来ない情報を知り得ることが出来た。また、震災の被害を抑えるうえで、残す・伝えるということの重要性を感じた。津波の威力や震災の被害は、受けた人にしかわからないことが多くあり、それらを伝えて残していかなければ、また同じ悲劇が繰り返されるだろう。講義の受講前に東日本大震災の被害について無知であった私のように、震災を知らない人々は多くいる。そのような人々や後世に伝えていけるよう、石巻南浜津波復興祈念公園やみやぎ東日本大震災津波伝承館は、これからも震災復興のシンボルとして残していくべきである。そして、現地で学んだことや得た知識を、私も周囲の人々に伝えて、防災意識を高めていこうと思う。

[参考文献]

- ・『石巻南浜津波復興祈念公園パンフレット』（https://www.thr.mlit.go.jp/m-park/memorial_park/pdf/ishinomaki_panfu.pdf）
- ・『みやぎ東日本大震災津波伝承館リーフレット』（<https://www.pref.miyagi.jp/documents/40349/rifuretto.pdf>）
- ・石巻観光ボランティア協会『いしのまき ま・ち・め・ぐ・り』2021年3月

文化遺産特別演習を通して学んだこと・感じたこと

1 部日本文化学科 1 年 2722161 高橋 花

今回、私は文化遺産演習で北海道・東北地方の様々な文化遺産を訪れた。沢山の場所を訪れたが、強く印象に残った場所が2つある。

1つ目は、宮沢賢治記念館だ。私は、宮沢賢治記念館と宮沢賢治イーハトーブ館を見学した。時間の関係上、宮沢賢治童話村は訪れることができなかつたため、次回また機会があれば訪れてみたいと思っている。

宮沢賢治記念館に行って感動したことは、宮沢賢治の様々な分野に及ぶ知識だ。宮沢賢治が多方面に造詣が深いということは、事前学習で知っていた。しかし、実際に記念館を訪ね、展示物を目にすると、改めてその知識の幅広さに驚かされた。宮沢賢治記念館では、科学、芸術、宇宙、宗教、農とジャンルごとに展示がされている。壁一面に原稿や作品に関連するものが飾られている様子は圧巻であった。幅広い知識を持っていたからこそ、面白い作品が書けるのだと理解した。

私が特に興味を惹かれたものは、宮沢賢治の描いた絵画だ。宮沢賢治は作家として名前が知られているため、絵画の作品はあまり知られていないと思う。私も、記念館を訪れるまで見たことがなかつた。宮沢賢治の絵画からは、彼の書く詩や童話の雰囲気と似た雰囲気を感じた。私は絵画に特別詳しいわけではない。しかし、記念館で見た宮沢賢治の絵は、いずれも私の目には魅力的に映った。

2つ目は、釜石市いのちをつなぐ未来館だ。この演習では、東日本大震災にまつわる場所を複数訪れた。その中でも、いのちをつなぐ未来館の、震災の体験を詳しく描いた展示が印象に残った。

特に印象に残ったものは、釜石東中学校の生徒が避難所にたどり着くまでの流れを、証言とともに書き記したものだ。私は、東日本大震災が起きた当時も北海道に住んでいて、被害もあまり大きくなかつた。その展示は、当時もし被害の大きかつた地域に自分が住んでいたら、ということを考えさせられた。釜石東中学校の生徒は、震災が起きた際、予想より大きい津波にも臨機応変に対応し、予定されていた避難場所から高台へ移動していき、死傷者を減らすことができた。また、自分たちが逃げるので精いっぱいになりそうなところ、近くの小学生や保育園児、身体の不自由な人も連れて一緒に避難をした。生徒たちの当時の心情を読んでいると、自分が同じ状況になった際、同じような行動ができるだろうかと不安になった。

釜石市鶴住居地区防災センターの被災状況の展示も、強く印象に残った。この建物は、災害時に中長期の避難生活を送る拠点避難所であり、津波が発生した際の緊急避難場所ではなかつた。しかし、「防災センター」という名前や、洪水や土砂災害の際は緊急避難場所として利用

できることから緊急避難場所と誤解され、東日本大震災が起こった時 200 人近くの人々が集まった。これには、避難訓練の際、高台にある緊急避難場所に代わって防災センターが避難場所として利用されていたから、という理由もある。地震の直後には、気象庁で予想される津波は 3m となっていた。防災センターの 2 階の天井までは 4m もある。「防潮堤があるからここまで津波がくることはない」と考える人もいたそうだ。しかし、津波の予想も 6m、10m と高くなっていき、ついには防災センターの 2 階にまで届いてしまった。展示の中には当時防災センターの 2 階に滞在していた人の証言もあった。天井付近にある隙間から顔を出して必死にもがいている様子を想像し、本当にぞっとした。津波が引いたあとにも、3 日目の夜になるまで救助が来なかった。津波によって溺死した人の他にも、救助を待つ間に低体温症で亡くなった人もいたそうだ。私は、この展示を見るまで緊急避難場所と避難所の違いがわかっていなかった。私が当時防災センターの周辺に住んでいたら、きっと防災センターへ逃げてしまっていただろう。

東日本大震災についてはニュースなどで様々なことを知っていたつもりだった。しかし、実際に被災地に赴き、被災した人々の証言や被災した物などを目にすると、テレビなどで見るよりも震災を鮮明に感じた。当時の状況を想像し、深く考え直すことができた。

この演習を通して体験したものの中には、上で述べたもの以外にも、興味を惹かれたものは沢山ある。入江・高砂貝塚で、教科書でしか見たことのなかった貝塚を生で目にした。是川縄文館で、国宝の合掌土偶を見ることができた。とおの物語の館で、遠野の方言で昔話を聴くことができた。平泉で、歴史ある建物を至近距離で見ることができた。色々な場所を訪れる間にも、その土地の食べ物を食べたり、自然や空気を感じたりすることができた。この演習で、実際に見たり、聞いたりして体験しないとわからないことが沢山あると改めて感じた。今まで興味を持っていたものや知っていると思っていたものでも、実際目にすると考え方が変わるものが沢山あった。この経験を忘れずに、これからの人生でも興味を持った物事には積極的に触れていこうと思う。

「心象世界」の体験

1 部日本文化学科 1 年 2722211 山下 泰聖

はじめに

私は小さい頃から、東北地方に対してどこかネガティブな印象を持っていた。根拠としては東日本大震災がある。私が小学校 1 年の時に起きたその震災以降、東北について触れる情報は、大体は悲しいニュースであり、そうでなくても復興に向けての希望など、基本的に暗い観念がある上での話だったりする。だからあまり良いイメージがなかった。今回参加を決めたのは、これを機にそうした先入観を塗り替えようと思ったからだ。実際に自分の目で見に行きたい。これを逃せば恐らくこの先行く機会はないと思った。

宮沢賢治

3 日目に宮沢賢治記念館を訪れた。

宮沢賢治とは何者かと問われると、大体の人は「童話作家」か、あるいは「東北で農業に従事した人」と答えるだろうか。どちらも間違っておらず私もそう思っていたが、もう一つ、彼は法華経を熱烈に信仰していた。宮沢賢治に仏教のイメージは全くなかったのが意外だったが、今回記念館を訪れて、私なりに納得するところがあった。彼の考えはしばしばこの法華経に基づいているらしい。

宮沢賢治記念館及び周辺に関連施設は、一種のテーマパークのように賢治作品やその世界観を再現していた。駐車場から降りて一番目を引いたのは、『注文の多い料理店』に出てくる料理店の外観を模した食堂である。他にも様々な再現物があったが、私が注目したのは、賢治が設計し当時は作られなかった花壇である。長方形の敷地で鍵穴のように通路があり、奥の円い花壇は花時計となっていた。花はどれも色鮮やかに咲いていた。天気が良かったのもあるが、どことなく神秘的な雰囲気があり、彼の「心象世界」というものにその時少し、触れられた気がした。

記念館には彼の写真と共に、農学校教師時代に講義したとされる「農民芸術概論」の序論と結論が書かれているパネルがあった。そこに書かれていることは彼の世界観を強く表している気がした。間の内容が気になり、帰ってからその全文を読んでみた。ここにその序論と結論、そして「農民芸術の総合」という段から幾つか抜き出して記す。

序論

……われらはいっしょにこれから何を論ずるか……

(中略)

近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい
世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する

(中略)

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである

(後略)

農民芸術の総合

……おお朋だちよ いっしょに正しい力を併せ われらのすべての田園とわれらのすべての生活を一つの巨きな第四次元の芸術に創りあげようでないか……

まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう

しかもわれらは各々感じ 各別各異に生きてある

ここは銀河の空間の太陽日本 陸中国の野原である

(中略)

巨きな人生劇場は時間の軸を移動して不滅の四次の芸術をなす

(後略)

結論

……われらに要るものは銀河を包む透明な意志 巨きな力と熱である……

われらの前途は輝きながら峻峻である

峻峻のその度ごとに四次芸術は巨大と深さとを加へる

詩人は苦痛をも享楽する

永久の未完成これ完成である

理解を了へばわれらは斯る論をも棄つる

畢竟ここには宮沢賢治一九二六年のその考があるのみである

記念館から少し歩いた所に、童話村という施設がある。ここには小学生たちが来ており、五感を使って彼の世界を楽しめるようになっていた。施設内のスピーカーから『風の又三郎』の有名なフレーズである「どっどど どどうど どどうど どどう」の歌が流れ、神妙な雰囲気を終始醸し出していた。

今回記念館を訪れて、彼の生き方・思想に少なからず憧れを抱いた。時間が足りず全て見て回ることが出来なかったのが悔やまれる。

おわりに

4泊5日の旅路で、どれも濃い経験をさせてもらったが、最後に東日本大震災について述べ

ておきたい。

震災遺構を巡り、当時のことについて詳しく知っていくと、それらは生々しいかたちを取って私の中に刻まれた。釜石市と石巻市で慰霊碑を見た。当時私と同年だった子たちの名前が、多くそこにあった。生きていたらどこかで会っていたかも知れない。何で私が生きていて、この子たちが死んでいるのだろう。そこにある名前を眺めていると、ふとそう思うことがあった。震災で全て洗い流された土地に新しく苗木が植えられている。これらが立派な大木となる頃には、今ここにいる私たちもいなくなっている。受け継がれて行く四次芸術をもってして、どんな時代が創られていくのか。

移動時間、バスに揺られながら見ていた田園風景は忘れがたい。朝も昼も夕暮れも夜も、どれも違った魅力を持った綺麗な情景として心に残っている。

[引用文献]

宮沢賢治『宮沢賢治全集 10』ちくま文庫、1995年

文化遺産特別演習～東北演習を通して～

1 部日本文化学科 2年 2721101 我妻 凌芽

1. はじめに

4泊5日の東北演習では、世界遺産である「平泉」や東日本大震災について、宮沢賢治についてなど様々なことを学んだ。本稿では、現地に訪問してさらに関心を持った、「平泉」と「東日本大震災」について述べていく。

2. 「平泉」について

2-1. 平泉について

平泉は岩手県にあり、2011年に世界遺産に登録された。平泉のなかで世界遺産に登録されているのは5か所ある。

2-2. 中尊寺について

一つ目は、「中尊寺」だ。中尊寺は、奥州藤原氏初代清衡が造営した。そして、創建当初のまま残る金色堂には、奥州藤原氏四代の遺体が安置されている。また、松尾芭蕉の『おくのほそ道』の「五月雨の降残してや光堂」でも有名である。讚衡蔵（寺宝展示施設）には、国宝や重要文化財をはじめ、多数の仏教美術工芸品を収蔵している。中尊寺金色堂には一度行ったことがあったが、何度見ても見とれるほど神々しさを感じさせる建造物でとても感動した。

2-3. 毛越寺について

二つ目は、「毛越寺」だ。毛越寺は、奥州藤原氏二代基衡、三代秀衡が造営した。当時の建造物はすべて焼失したが、庭園などの遺跡が良好な状態で残されており、復元整備された「大泉が池」は平安時代の浄土庭園の素晴らしさを伝えている。筆者が言った時期はまだ紅葉がピークではなかったが、少し色づいた紅葉と庭園が綺麗に整備されており「大泉が池」に反射して、とても綺麗だったため紅葉がピークになる時期にもう一度訪れたいと思った。

2-4. 無量光院跡について

三つ目は、無量光院跡だ。無量光院跡は、奥州藤原氏三代秀衡によって造営された寺院の遺跡である。京都の宇治平等院鳳凰堂を模して建立された阿弥陀堂と、阿弥陀堂の周囲を取り巻く池を中心に伽藍が構成されている。奥州藤原氏が滅亡した現在、建物は残っていない。

2-5. 観自在王院跡について

四つ目は、観自在王院跡だ。観自在王院跡は、奥州藤原氏二代基衡の妻が造営した寺院の遺跡である。大小二棟の阿弥陀堂跡の前面に舞鶴池を中心にした浄土庭園が広がっている。

現在は、往時の堂塔をすべて失い、池以外は残っていないがしっかり整備されている。筆者が訪れたとき、「綺麗に整備された公園」という印象を受けた。そのことから、現在建物が残っ

ていない場所を訪れる際は、事前学習が必須だということを改めて感じた。

2-6. 金鶏山について

五つ目は、金鶏山だ。金鶏山は、奥州藤原氏はその山頂に経塚を営んだ信仰の山である。

東麓には蔵王権現堂跡の伝承を持つ「花立廃寺跡」がある。平泉の浄土庭園のうち、毛越寺・観自在王院跡・無量光院跡の3つが、金鶏山に焦点を合わせていることから、平泉の大きな特徴だと言われている。

3. 東日本大震災について

説明するまでもないが、東日本大震災は、2011年に発生し、津波などで東北地方に甚大な被害をもたらした災害である。今回の演習では、東日本大震災によって被害を受けた岩手県釜石市、陸前高田市、宮城県石巻市を訪れ、「被害がどれほどのものだったのか、どのような状況だったのか」を学んだ。

釜石市では、震災の出来事と、災害から学んだ教訓を伝える「釜石市いのちをつなぐ未来館」を見学した。「釜石市いのちをつなぐ未来館」には、津波に流されて当時の時間で止まった時計、泥で汚れた結婚指輪、泥まみれの鍵盤ハーモニカなどが展示されていた。当時の物を見ると凄惨な出来事であることを痛感し、見るのが辛く感じると同時に悲しくなった。

津波が起きたときに、家族の様子を見に行くのではなく、家族が逃げていることを信じて個人で逃げて自分の命を守るという「津波てんでんこ」という考えを大切にしている、避難訓練などの取り組みが釜石市民の命を救ったという話を聞いて感心した。日本は地震大国と言われており、様々な場所で地震が発生している。胆振東部地震では津波は来なかったが、いつ東日本大震災のような災害が起こるか予想がつかないため、釜石市民で大切にされている「津波てんでんこ」という考えを大切に、避難訓練を定期的実施したり、避難バッグを玄関に用意しておくことが必要だと感じた。

陸前高田市では、津波に流されずに残った「奇跡の一本松」と、周辺の復興施設や震災遺構を見学した。震災遺構は当時のまま残されており、凄惨な建物の状態に恐怖した。

石巻市では、ガイドの方から、石巻市の被害や復興状況を聞き、「石巻南浜津波復興記念公園」と「みやぎ東日本大震災津波伝承館」を訪れた。「みやぎ東日本大震災津波伝承館」では、展示のほかに地震が発生した3月11日の午後2時46分になると、円形の屋根の影が床面のラインと重なったり屋根の高さを、石巻市を襲った津波と同じ高さにしたたり構造も工夫を凝らしていた。

4. 演習全体を通して

上記以外に、遠野市、松島、貝塚、宮沢賢治記念館を訪れた。東北に行く前から楽しみにしていた「平泉」と「松島」に行くことができて嬉しかった。遠野市で、あまり聴く機会がない「遠野物語」を聴けて貴重な経験になったし、東日本大震災の被害状況と津波に対する対策の取り組みの話を知ることができてとても良い学習になった。そして、東日本大震災の防災情報は自分だけの情報に留めずに、家族や友人にも共有するべきであると感じた。

今回の演習では良い学習になったため、機会があればまた現地学習しに行きたいと思った。

被災地 鵜住居町と平泉 中尊寺での所見

1 部日本文化学科 3年 2720116 魚住 将太

1. はじめに

2022年9月12日から五日をかけて一道三県10市区町村を巡ったこの旅行は、大変素晴らしい経験だった。また、新型コロナウイルスの感染が比較的落ち着いている時期に、これまで控えざるを得なかった旅行が、しかも4泊5日10市区町村の大旅行が完遂できたことはかなりの幸運でもあった。本稿では、旅行中でとくに印象深かった場所である岩手県釜石市鵜住居町と、同県西磐井郡平泉町にある中尊寺での所見を述べたい。

2. 被災地鵜住居町と中尊寺

1) 岩手県釜石市鵜住居町

2日目の夕方、釜石市鵜住居町に着く。鵜住居町は周囲を高い山に囲まれながらも、一部が大槌湾に面した自然豊かな町である。本来の目的である釜石市のちをつなぐ未来館での学習を終えたのち、強めの西陽がさすなかで周囲を散策すると、いくつか見慣れない光景に出会った。

まず、あらゆる建築物が新しいのである。家々は皆新築である上、全く同じ姿の一軒家が軒を連ねているところもある。未来館に隣接する市営の体育館や土産物屋、公民館、小学校、駅舎などももれなく新築であり、さらには、電線や信号機、コンクリート舗装までもが新しさを感じさせるのである。鵜住居町は深刻な津波被害を受けた地域でもあるため、古いものがいくつも残っていないのは当然ではあるのだが、しかしそれでも、目につくものがみな新しい街並みというのは見慣れない様だった。

そう感じるのはおそらく、普段目にする「街並み」が、新旧入り混じった景色だからだろう。一般的に、その街全体に決定的な変化でもない限り、街並みというものは、長く繰り返されてきた街の新陳代謝を表すはずである。それは街の歴史を示す鏡とも言えるわけだが、今の鵜住居町の街並みは想像しうる新陳代謝の結果ではない。ほぼ全てが地震と津波によって組み替えられた末に生み出された景色であり、本来の鵜住居町が迎えていた姿ではないのだろう。そう思うと、震災によって奪われるものの中には、その街のあるべき姿や、積み重なってきた歴史も含まれるのだと考えずにはいられなかった。

また、未来館から見える市立の小学校・中学校の立地が非常に特徴的だった。校舎自体がかなり高い土地の上に建てられており、その正面には長い階段が設けられているのである。段数は定かではないが、小学生や高齢者はかなり苦労しそうだと思えるほどに高く、長い階段である。小中学校がこのような設計された背景には、震災の経験から身に染みて感じた高所の重要性が伺えるほか、ふたたび鵜住居が津波に襲われた時には確実に命が助かるように、との切実な意図があるのだろう。

ちなみに、鵜住居を襲った津波は階段中頃の高さ（約11m）にまで到達しており、その目印として最高到達地点の段差はオレンジ色に着色されている¹⁾。右脇に設置された看板には「ここより上へ！！」との記載がある（図1参照）。



図1 釜石市立鵜住居小学校前の長い坂

2) 岩手県西磐井郡平泉町 中尊寺

かつて一度だけ、平泉を訪れたことがある。中学の修学旅行で中尊寺金色堂を訪れたのだ。ただ、その当時の記憶はほとんど無い。なんとなく金色堂をサッと見て、長い坂（月見坂）を下ったのを僅かに覚えている程度である。そのため、二度目の中尊寺参拝には期待を寄せていたのだが、中尊寺は私の想像を超えた場所だった。

まず、境内にある見所の多さに驚いた。中尊寺境内には、入り口からメインの金色堂に至るまで長い一本道が通っているのだが、それに沿っていくつものお堂が建てられている。公式HPの地図上の記載²⁾によると、「堂」とつく建物だけで12箇所へのぼり、そこに神社や宝物館、能楽殿などを加えると、訪れることのできる見所は20箇所ほどにもなる。今回そのうちのほとんどを見て回ることが出来たのだが、回り尽くした頃には2時間半が経過しており、大変満足できるボリュームだった。中学生のときに見た中尊寺の景色が、全体の内のごく僅かでしかなかったのだと感じた。

また、お堂のなかに安置されている仏像（本尊）が多様多样だったのも興味深かった。釈迦や薬師如来、不動明王、大日如来など、誰もが一度は聞いたことがあるものが一通り揃っているほか、平泉の象徴とも言える平義経と武蔵坊弁慶の木像も安置されており、仏教のデパートとでも例えられそうなほどだった。私は特別仏教に詳しいわけではないが、多様な本尊が安置

されていたために「このお堂には誰がいるんだろう、ああ、ここには大日如来が……」などと考えながら各所を巡ることができた。普段仏教に興味がなくとも金色堂や讚衡蔵（宝物館）と合わせて境内を巡ることで、平泉での仏教世界を身近に感じられるのではないだろうか。

さらには、境内をずっと進んだところにある神社が印象的だった。そもそも、寺の境内に神社があること自体が驚きだったが、ここは白山神社という小柄な神社で、正面には人が通れるサイズの円形の縄が張ってあるのが特徴である。これは茅の輪（祓の輪）と言い、輪を通ることで日頃重ねている罪穢れを祓われるようである。もちろん私は通ってきたのだが、なんだか仏教的なアトラクションのようで不思議な気持ちだった。中尊寺を訪れる際には、是非とも白山神社まで足を運んでほしいものである。



図2 白山神社と茅の輪

3. おわりに

はじめ、「文化遺産特別演習」との字面を見たときには随分と真面目で硬い印象を受けたものだが、実際はもっと自由に、ゆったりと各所を巡りながら文化遺産に触れられる旅行だった。次回の行き先はわからないが、どちらにせよ、自ら進んで行く機会がなさそうな地域での意外な魅力に満ちた経験が用意されていると思う。どこか行ったことのない場所で新鮮な経験をしてみたい、と感じている方などは、ぜひともこの演習を検討してみてほしいと思う。

[参考文献]

- 1) <https://mainichi.jp/articles/20210331/dtl/k03/040/021000c> (2022-11-31 閲覧)
- 2) <https://www.chusonji.or.jp/around/index.html> (2022-11-25 閲覧)

世界遺産と震災遺構を訪れて

1 部日本文化学科 3年 2720157 四戸 里美

1. はじめに

まず、私がこの講義を受講した理由から正直に述べると、東京や大阪、京都といった日本を代表する観光地に比べて、東北は生涯の中で自ら足を運ぶかというとその可能性が低いと考えたからである。何かのきっかけがないと東北なんて行かないよな、と思っていた矢先に出会ったのが本講義であった。(とは言ってもこの講義を知ったのは私が大学一年生の時の新入生ガイダンスであるが、新型コロナウイルスの関係で3年生の今、ようやく受講することが出来た。) よって本稿では、そんな気持ちで参加した私の演習中に見て感じたものを全ての施設には触れられないが、記すこととする。

2. 町の歴史や文化を伝える場

北海道洞爺湖町にある入江貝塚は縄文土器や石・動物の骨で作られた道具が出土したほか、竪穴住居やポリオという病気に罹った成人男性の人骨なども発見されたそう。高砂貝塚は貝塚だけでなく竪穴住居や墓などが出土しており、縄文時代の後期から晩期の生活の跡が見られる。また、畑跡が見つかり、近世アイヌの人々が生活していた痕跡が見つかり、入江貝塚は竪穴住居の骨組み、高砂貝塚は貝殻が設けられており、当時の様子が想像しやすく整備されていた。この両貝塚の間に入江・高砂貝塚館があったのだが、休館日だったため、見学することが出来ずに非常に残念であった。もう少しこの貝塚について学びたかった所存である。

学芸員課程を受講している私にとって、是川縄文館とおの物語の館は展示されている内容のことだけでなく、博物館における演出面でも非常に勉強になった博物館であった。というのも是川博物館では展示スペースの前に「縄文への道」「縄文くらしシアター」を設けることで、縄文時代の世界へ入り込ませるストーリー作りがなされていた。さらに展示スペースも中居遺跡から出土した土器に用いられている漆の赤と黒を基調としており、黒い(暗い)展示スペースだからこそより照明が当てられている展示品が際立ち、異世界観を演出している。基本的に照度を落としている博物館はよくあるのだが、壁や床までもが黒を基調としている展示スペースは多くない。とおの物語の館は昔話蔵が特に印象的だった。遠野地方に伝わる昔話を紹介するスペースだったのだが、昔話という特質上昔話を裏付ける実物などはないに等しい。しかしこのスペースでは「ハンズ・オン」という身体を用いて学習する展示方法が用いられており、幅広い層が楽しめるようになっていた。これらの高いプロデュース力には脱帽したが、非常に良い勉強になった。

3. 東日本大震災の被災地を目の当たりにして

釜石市いのちをつなぐ未来館が位置する鵜住居町は東日本大震災の際は11mの津波が時速36kmで襲って来たそうで、死者305名、行方不明者49名、869もの家屋が被害に遭った。津波の被害が少ない(もしくは遭っていない)別の地区と比べて、(表現は悪いかもしれないが)異空間にいるようだった。被害の少ない地区は古くからある瓦屋根の家が所狭しとひしめき合

うのに対し、いのちをつなぐ未来館の周辺は区画整備がされているのにも関わらず、建設されて年月がそれほど経っていない家屋や公共施設が点々としかなく、それらの周りの土地は手入れされていない状態だった。いのちをつなぐ未来館に入る前に既に東日本大震災の被害の大きさを改めて実感した。いのちをつなぐ未来館では職員さんがお話をしてくださり、この地区ではいぜんから地震が来たら津波が来るから逃げることや「てんでんこ」(自分の命は自分で守る)と言い、人を待たずに各々逃げよう、と教えられていたため、地元の人が多い海沿いの人は早く避難していたり、近隣の小中学校では中学生が小学生を連れ避難したりしていたそうだが、居住歴の浅い人の多い市街地では逃げ遅れる人が多かったそうだ。これらの話は職員さん本人やその他地域の方の実体験を交えてお話してくださったので、とても心が痛むと同時に日頃からの防災(減災)意識が大切なことを学んだ。

奇跡の一本松のある高田松原津波復興記念公園は、震災前は辺り一面に芝生が広がっていて公園の入り口から5分ほど歩いて先まで行くととても綺麗で穏やかな海を見ることができた。奇跡の一本松の近くにあった建物は震災遺構として残されており、またその周辺の川のようなもの(震災前からあった川なのか、震災の影響でできた海と繋がる水たまりなのかは判別できなかった)にはたくさんの土砂や木が滞留しており、震災の形跡を物語っていた。広がる芝生、綺麗な海のすぐ近くに震災遺構が残っていることで、海(自然)の美しさと脅威を同時に感じ取ることができた。とても穏やかな顔をしている海が多く建物を壊し命を奪ったなんて、当時ニュースで津波の様子を目の当たりにしたがとても嘘のように思えてしまった。しかしあの自分で見た映像、そして今回見学させていただいた震災関連の施設で見た震災当時の写真やエピソードも紛れもない事実、忘れてはいけない事実であり、必ず胸に刻んでいなければいけないと強く思った。

4. 最後に

本演習を受講して、当初は軽い気持ちで挑んだものだったが学んだことは想像以上に多かった。もちろんこの報告書で触れなかったことも含めて東北地区の歴史や文化を学べたのはもちろんのこと、自分の今後の人生における生き方まで考え直していかなければならないと感じた。それはただ同じ資料を家や学校で見ただけでは得られなかった感覚であり、現地の空気や現地の人のお話を身体で感じたからこそその感想である。昨今リモートやバーチャルなどその場になくともネットを駆使して色々なことができるようになっているがそれよりも自分の五感で直接確かめた方がいい。そうでなければ私は是川博物館の世界観に没入させる展示構成や海が綺麗な反面どれほど無残な被害を生み出せる恐ろしい力を持っているかなど現実味を持って知ることも記憶に残すこともできなかったであろう。今後本演習が開講されるのか。開講されても同じ地域に向かうのかは分からないが、地域に関係なくこの講義が開講され、受講を迷っている後輩がいるのであれば、私は強く受講することを勧めたい。

[参考文献]

- ・入江貝塚公園 | 社会教育課 (town.toyako.hokkaido.jp) (最終アクセス: 2022年11月24日)
- ・高砂貝塚公園 | 社会教育課 (town.toyako.hokkaido.jp) (最終アクセス: 2022年11月24日)
- ・奇跡の一本松/陸前高田市ホームページ (city.rikuzentakata.iwate.jp) (最終アクセス: 2022年11月29日)

文化遺産特別演習

1 部日本文化学科 4年 2719118 伊東 璃菜

初めに

私が文化遺産特別演習を履修したきっかけはコロナ禍で2・3年時にはこの演習が開講されておらず、1年生の時に参加するべきだったと後悔していたからである。また私は教職課程をとっており、高校地理歴史科の免許を取得予定である。教育実習を終えた4年生の現在だからこそ文化遺産に触れ、実物を見ることで教科書だけでは分からないような、新たな気付きに出会えるのではないかと感じたことが参加に至ったきっかけだ。実際にフィールドワークを行う機会はこのコロナ禍で減っている。自発的に行動を起こさない自分にとって、とてもいい機会であった。

東北研修

1日目には洞爺湖で入江高砂貝塚を見学した。貝塚はゴミ捨て場…と中学の歴史で習った。しかしこれはただのゴミ捨て場だけではなく人を葬ることもあるそうだ。貝塚は吊いの場でもあったという新たなことを知ることができた。また復元された竪穴住居も見ることができた。これは教職を取っている自分にとってはとても良い経験になった。実際に実物を見ることで授業内での説明に現実味が生まれるのだ。歴史ではフィールドワークが重要なので、ぜひ覚えておきたい経験である。

2日目の是川縄文館に関しても上記と同様のことが言える。泉山氏が保管していた出土品が主に展示されている是川縄文館では主に縄文晩期の土器が多く展示されており、狩猟採集が中心のため弓や石斧などもあった。これらも教科書で見ると遥かに美しく感動したことは言うまでもない。また赤漆が塗られた飾り太刀など、祭礼的な要素のものもあった。当時の縄文人は作り上げたものを自然に還す「もの送り」を行っていて、これはアイヌの熊送り（イオマンテ）に類似する文化も散見でき、アニミズム的思想において縄文文化はアイヌ文化と似通っているところがあると感じた。

そしてここでは国宝の「合掌土偶」も見ることができた。安座し合掌のポーズをとっている合掌土偶は函館にある中空土偶とは違って中は空洞ではないそうだ。このような土偶はもの送りの対象からは外れ、家の奥に大切に飾られていたことから何かの信仰のあらわれなのだろうか。

3日目の宮沢賢治記念館では、事前学習を含め大学の講義で宮沢賢治の作品をいくつか読んでいたため、どの資料も興味深く感じた。宮沢賢治の作品を知ったうえで見学すると芸術、宗教、音楽、宝石、天文学などの知識がどのように作品に取り入れられているか、様々な考察の余地があり見てとても楽しかった。セロ弾きのゴーシュ、注文の多い料理店の立体模型が一番印象に残ったので、もう一度それらの作品を再読した。

被災地を訪れて

この講義の重要なテーマである東日本大震災について知るために釜石や石巻、陸前高田などを訪れた。釜石市ではいのちをつなぐ未来館を見学し、津波を経験したことの無い私は当時の東日本大震災を経験した現地の方のエピソードを聴き、実際の津波の映像や遺品を見てその辛さを追体験した。津波が押し寄せる映像は命からがら逃げる人達の気持ちを容易に想像させた。展示されていた黒板にはチョークで書かれた掠れた「卒業式」の文字があった。その小学校は3月18日が卒業式だったんだと。それを見た瞬間に耐えられなくなった。2011年当時小学五年生だった自分よりも年下の子供でさえ、自力で逃げていたと思うといたたまれない気持ちになった。陸前高田では奇跡の一本松を間近で見た。そこの目と鼻の先には海がありとても綺麗な眺めだった。しかしその海がたくさんの人の命を奪ったと思うと、皮肉なものだ。

被災地を訪れ震災跡地や実体験、被災した建物などを見ることはとても重要である。北海道でただ話を聞くのとは訳が違う。百聞は一見にしかずという言葉の通り、その場所を訪れることで色々感じる事ができた。今でも家を失い復興住宅に住む人々への支援、かつて住宅があった更地など震災の爪痕を見てきた。また事前学習で震災遺構とは次の世代の人達に向け震災の記憶を伝え、教訓とするために保存するものだを知った。発表した際も知識としてその事を理解してはいたが、実際に被災地を訪れることで震災遺構の重要性をひしひしと感じた。そこで起こった事を直ぐに誰かに伝えたくなくなったのだ。「てんでんこ」という言葉を知った時も、陸前高田で奇跡の一本松を見た時も、石巻でバスの中から門脇小学校を見た時も、どれも決して風化させてはいけない記憶だと心の底から思ったからだ。

感想

岩手県平泉には中学の修学旅行で行ったことがあった。中尊寺金色堂には懐かしいと感じ、毛越寺では座禅体験をしたことを思い出した。だが今回の旅行は中学の頃よりももっと実践的な知識を身につける事ができた。また個人的に行くことが出来て最も嬉しかった場所は松島である。雄島に奥の細道の碑が建てられおり、そこで芭蕉のように1句詠むことができた。改めて文化遺産特別演習を履修して良かったと思った。

文化遺産特別演習～東北演習を通して～

2部日本文化学科 2年 2821105 五十嵐 博紀

1. はじめに

4泊5日の東北演習では、昔の文化や東日本大震災についてなど様々なことを現地で学んできた。今回は実際に行ってみて、現地を訪問してからさらに興味が深まった遠野物語と東日本大震災について述べていく。

2. 遠野物語について

遠野物語とは、遠野出身の佐々木喜善が語った民話を民俗学者の柳田國男が編纂し1910年に発刊したものである。神や動物の話など楽しい話から殺し合いや妖怪といった怖い話など様々なものがある。怖い部分や悪い部分も含め、昔の日本人の暮らしのありのままを記録した遠野物語は全119話で構成されている。また遠野には、『桃太郎』や『浦島太郎』、『猿蟹合戦』など誰しも1回は聞いたことがある昔話が多く伝わっている。このように多くの物語が伝えられている岩手県遠野市では、とおの物語の館に訪れた。ここでは、語り部の方による実演を聞いた。東北の訛りや語り部の感情のこもった話の仕方など本では味わうことの出来ない貴重な時間を過ごすことが出来た。物語の始まりにいう「むがし、あつたずもな。」や終わりにいう「どんとはれ。」というフレーズがとても印象に残っている。また、施設内には元々の物語を主人公や登場人物を変えて自分で物語を作っていくというものや巻物形式の物語など映像やイラストを通して面白い体験をし、幼い子供に戻ったような感覚になった。この場所に訪れて、後世にも昔話を伝えようとする努力や昔話の面白さや歴史の深さを再発見することが出来た。

3. 東日本大震災について

2011年3月11日に発生し、津波などで東北地方に大きな被害をもたらした東日本大震災だが、今回の演習では岩手県では釜石市と陸前高田市、宮城県では石巻市を訪れ当時の被害の大きさや今の復興状況などを見てきた。釜石市では、震災の出来事や教訓を伝える釜石市いのちをつなぐ未来館や慰霊碑などがある公園を見学した。その施設では、津波によって汚された黒板や津波に流された人たちの物も展示されており、当時の物を見るのはとても辛い部分があった。また、津波が起きたら、家族一緒にではなくてんでんばらばらに逃げ、自分の命を守るという津波てんでんこという考えを昔から大切にしており、日々の訓練の積み重ねが釜石市の子供たちの多くの命を震災から救ったということを知り、驚いた。この津波てんでんこをさらに知ってもらうために小学生や中学生がキャラクターやポスターを使って分かりやすく伝える活動をずっと続けている。公園では、震災で犠牲になった人たちの名前や鶴住居地区にきた津波の高さを表すモニュメントがある。津波の圧倒的な高さや慰霊碑の名前の多さをみたとき、驚愕した。陸前高田市では、津波に流されずに残り復興のシンボルとなっている奇跡の一本松と

その周辺の復興施設や震災遺構を見学した。どの場所でも感じたことだが特に陸前高田市では、被災した人たちの気持ちを考え亡くなった人がいない場所を選ぶなど震災遺構を条件つきで残すことで、教訓を伝えていくだけではなく被災した人たちの気持ちを尊重した復興まちづくりを行なっていることがわかった。石巻市では、ガイドの方から石巻市の震災の被害や復興の状況などを聞き、バスから街並みをみたりみやぎ東日本大震災津波伝承館などがある公園を歩いたりした。みやぎ東日本大震災津波伝承館では、展示の他にも地震が発生した3月11日の午後2時46分になると、円形の屋根の影が床面のラインと重なったり屋根の高さを石巻市を襲った津波と同じ高さにしたりとするなど構造も工夫を凝らし若い世代にも津波の恐ろしさを伝わりやすいようにしていることを知った。また、石巻市は、住宅地が津波に流され震災後は新築の建物が多く高い場所に多く建設されていた。被災直後の津波に流され泥水や瓦礫と共に流され、家がほぼ無い状態の写真を見たときは言葉を失った。どの県も復興が進んでおり、これからは震災をどうやって継承していくのかということや地元の活気を被災前に戻そうと努力をすることなどを考え、復興活動を行なっているということがわかった。

4. 演習全体を通して

他にも世界遺産である平泉や松島、貝塚などの遺跡にも訪れた。正直、東北に行く前は自分の興味のある宮沢賢治などの分野以外はあまり興味が無かったが、現地に行き話を聞くことで新たな発見を多くすることができ、現地へ直接行くことの大切さを感じた。また、昔の文学や震災の話聞いて考え方も少し変化したように感じる。一方で、時間が足りなく回る事のできなかった場所やもっとゆっくりと見ていたかった場所もある。そのため、機会があればまた東北に行きたいと感じた。とても充実した演習を送ることが出来たが、今回学んだことを他の人に共有したり興味のあるものはさらに自分で調べたりして自分の興味のあるものを発展させて行きたいと考えている。

とおの物語記念館を訪れて

2部日本文化学科 2年 2821132 藤井 汐里

1. はじめに

私がこの研修に参加した理由は、宮沢賢治記念館に行くという予定が組み込まれていたからというものであった。しかし、その目的以外に、胸を震わせたものがあった。それは、とおの物語記念館を訪れた時である。実際に、現地の人が話す「語り部」を聞いたり、昔話に触れたりすると、その地域の伝統や文化を体で感じることができ、大変感動した。そこで今回、この演習の報告書で、とおの物語記念館で学んだことについて述べる。

2. とおの物語記念館について

とおの物語記念館で学んだことを述べる前に、軽くこの記念館について説明しようと思う。とおの物語記念館は、岩手県遠野市の遠野駅から歩いて5分程のところに位置しており、施設内は主に、昔話蔵、柳田國男展示館、遠野座の3つに分かれている。

昔話蔵は、元はこの地にあった作り酒屋の蔵を改装し、古くから伝わる昔話を絵やイラスト、映像などを使って紹介している。さらに、遠野出身の佐々木喜善を紹介するコーナーや映像ライブラリー、絵本コーナーも設けられている。このように、幅広い世代の人々が楽しみ、学びながら、それぞれの想像を膨らませることのできる場所となっている。

柳田國男展示館は、柳田國男の生涯や遠野での足跡、功績、著作などを紹介している。柳田國男は、現在の兵庫県神崎郡福崎町出身で、日本における民俗学の開拓者である。ここでは、その柳田國男が過ごした旅館や永眠するまで妻と共に暮らした隠居所の内部や今となっては見ることが少なくなった囲炉裏などを見ることができる。

遠野座は、遠野の文化に触れることができる劇場空間となっている。素朴で温かい遠野の方言で語り部が聞かせてくれる昔話や、大切に保存して継承してきた神楽をはじめとする多彩な郷土芸能を体感できる。

3. 遠野座、昔話蔵、展示館で体感したこと

まず、私たちはとおの物語記念館の遠野座に行った。そこで、3つの昔話を現地の方が話していた。方言が北海道とは違っており、物語を締めくくるときに必ず、「どんどはれ」という言葉を使っていた。現地の人にとってはなんでもないような言葉かもしれないが、異なる言語（ここでは方言）に触れることで、同じ言語でも違った感じ方や捉え方ができるのだと考えられる。また新型コロナウイルスの影響でこのような体験はできないと思っていたため、今回この貴重な体験をすることができ、自分の視野を広げられたと感じた。

次に、昔話蔵に行った。その中でも特に、昔話を自分で作れられる映像の仕掛けがとても面白かった。内容は、桃太郎、舌切り雀、猿蟹合戦、花咲爺さん、浦島太郎の5つで、その内容

を選択すると、登場する重要人物のほとんどが自分で選ぶことができ、自分だけの物語を作ることができる仕掛けとなっている。猿蟹合戦の悪者を蟹に、桃太郎の主人公を狐にと、根本から物語を変えることも可能となっている。この仕掛けは、体験したことの無いものであったため、物語を作る楽しみや想像力を広げることの苦勞さを直に体感できた。

最後に、柳田國男展示館を拝見した。ここは昔ならではの構造で、建物の天井が低く、縁側や囲炉裏があり、訪れたことはないはずであるのに懐かしい気分させられた。そして、この施設の中に入って感じたことがある。それは、とても「光」が入る建物であるということだ。もちろん、現在建てられている家も「光」が入るように設計されているものが多いだろうが、当時の時代でも「光」が多く入るように設計されているのだと感じた。「光」というものは、人間にとって明るいと感じさせたり、暗いと感じさせたりできる。人によって、「光」という1つのものをとっても、感じ方が違うのが、とても面白いと私は考える。そのため、どの時代にも「光」というのは大事なものであり、その美しさや有難みを感じることができた。この展示館は、まるで自分がその時代の人間になったような気分が体験できる場でもあり、人によってその建物を通して見出だせるものがあるのだと感じた。

このように、3つの施設では同じ敷地内にあるのにもかかわらず、全く違った内容を体験することができることがわかった。また、一つ一つの施設に、とても工夫がなされているとも感じられた。とおの物語記念館のことをもっと多くの人に知ってもらい、普段はできないような貴重な体験をしてほしいと考える。

4. 終わりに

以上が、とおの物語記念館に行った際に私が体験したこと、感じたことである。確かに、自分の本命である宮沢賢治記念館に行ったときも、大変貴重な体験や感慨深いものがあった。しかし、とおの物語記念館では、自分の想像していたもの以上に貴重な体験ができ、これから生きていく上で大切なことを学べたと考える。今回はあまり時間がなく、宮沢賢治記念館もおの物語記念館もゆっくり見回することはできなかったが、次の機会に訪れた時には、じっくり見て、更に学びを深めたい。

[参考文献]

とおの物語記念館パンフレット

宮沢賢治～記念館・童話村～

2部日本文化学科 2年 2821133 船木 奏音

私は本が好きでよく読むのだが、とある本で宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」の舞台を演じるシーンを見て以来、宮沢賢治が書いた物語が好きである。その時の読んでいた本の内容で舞台をやるにあたっての役作りの際に行われた役の解釈の仕方がとても面白く、私はそこから宮沢賢治自体にも興味を持ち、宮沢賢治の物語へと引き込まれた。そして、この文化遺産特別演習の行き先が東北であり、また、一度行って見たかった宮沢賢治記念館と童話村に行くことを知り参加することを決意した。

まず、宮沢賢治とは詩人であり童話作家でもある人物で、少しの間ではあったが学校の先生ができる程、頭がよく、他にも芸術、地域農業、科学といった様々な分野で才能を発揮していた人物でもある。それは作品を読むことで分かるほど、宮沢賢治の作品にはそれぞれの分野で学んだことが活かされているものが多く存在する。前述した通り様々な分野で才能を発揮していたことから、宮沢賢治記念館の建物内ではその宮沢賢治が才能を発揮していたとされる科学、芸術、宇宙、宗教、農業の分野ごとに展示が分かれており、それに合った直筆原稿または作品の複写や実際に使われていた愛用品、その分野の中でもどれに特化して学んでいたかなどの研究成果がそれぞれのパネルで壁一面に紹介されている。フロアの中央では各分野の思想や研究・創作活動について細かく動画での説明が行われている。また、今回行った時期には特別展示が行われおり宮沢賢治の詩の作品の1つでデビュー作でもある「春と修羅」についての説明が壁に隙間なく展示されていたのと「春と修羅」の朗読ビデオがループされて流れていた。期間限定で行われていたその展示は後日追加で「雨ニモマケズ」の直筆メモを展示する予定で、日程がもう少し遅ければ見ることも出来たのだがそれは叶わなかった。

宮沢賢治記念館の建物の周りには宮沢賢治の作品にゆかりのある建造物や植物、銅像などがあり、中でも宮沢賢治記念館と童話村の間辺りにある山猫軒は周りが駐車場で開けた空間になっていたのもあるかもしれないがとても存在感を放っていた。実際に建物に近づいてみると入口付近には「注文の多い料理店」に迷い込んでしまったのではと思わせるような作中のセリフが書かれている看板があり、建物内のあちらこちらにもそれが記されていて、施設内はお土産屋さんとレストランになっていたのだが、謎の臨場感があって入っただけでもドキドキ感があった。お土産も作品に沿ったものが多く並べられていて、宮沢賢治の作品好きにはたまらないものがあつた。

時間が迫る中どうしても童話村まで行きたいとなり、友人と童話村に向かおうとしたのだが、断念しそうになるほど急こう配でとても長い階段があつた。しかし、この長く大変な階段ですら仕掛けがされていて、「雨ニモマケズ」の文が一文字ずつ張り出されていて歩くごとにそれを読み進めることができるという、階段を使う時であっても楽しさを忘れない工夫がされていてとても素敵であつた。童話村は入る直前から、「銀河鉄道の夜」の駅名が書いてある看板が

置いてあったり、銀河鉄道の汽車があって実際に乗ることができたり、入口のアーケードが銀河ステーションと書かれた建物で駅舎になっていたり、とても心が躍った。中は公園のようになっている各所に宮沢賢治にまつわる建物や銅像などがあつた。時間の関係上すべてを回ることは出来なかったが、その断片であっても宮沢賢治の作品を読んでいる者なら、そのしっかりとした解釈の出来に惚れこんでしまうような場所である。夜はライトアップを行っているらしく、あちらこちらに虹色の綺麗なモニュメントがあつて昼間でもかなり幻想的だったのでそれが見られなかったのがとても悔しかったし、後日見ることのできなかつた部分を写真検索して見てみたのだが、実際に見たかつたものが多数存在していて、必ずいつかまた行こうと悔しさを胸に誓つた。

私は、実際にあの場所に立って見学することで、改めて宮沢賢治の作品を見直す良い機会を得たし、知らなかつた解釈の仕方を得ることが出来てとても収穫の多い演習だつたと捉えている。また、遠出をして学習をするという面では経験として実際に行つてみたいと思ふ場所にはどんな些細なきっかけでもいいので一度行つて学ぶことがとても大切なことだと実感した。

継承と情報の伝え方を考える

2部日本文化学科 4年 2819130 高山 礼海

1. はじめに

今回の文化遺産研修では、北海道・北東北の縄文遺跡群から始まり、宮澤賢治、遠野物語、平泉、そして東日本大震災への見聞を深めた。これらの資料館・伝承館での知見を通して、遺産をいかに継承していくか、また、効果的な情報の伝え方とは何かを考える切っ掛けとなった。本報告書では、遠野物語を伝える「とおの物語の館」と東日本大震災の記憶と教訓を伝える「釜石市いのちをつなぐ未来館」での継承と情報の伝え方を考える。

2. とおの物語の館にて

とおの物語の館は、日本の昔話や『遠野物語』に出てくる遠野地方に伝わる民話を紹介し、その世界を体感できる施設だ。「遠野座」では、語り部が遠野の方言で昔話を聞かせてくれる。「むかすあつたずもなー」から不思議な昔話の世界は開かれ、「どんどはれ」でふっと現実に返らせてくれる温かい語り部の存在に、この資料館の伝え方は「体感する施設」なのだと実感した。

「昔話蔵」では、物語の代表的な一場面のフレーズに大きなイラストを合わせたパネルが多勢で出迎えてくれる。映像ライブラリーや絵本コーナーもあったが、ITの仕掛けによって昔話の世界をより身近に、面白く体感できる施設となっていた。一つ目の仕掛けは影絵だ。大きなテーブルの上には暖かなスポットライトで照らされて十個余りの小物が置いてある。小物に触れると、その小物の影から、関連した昔話の影絵のアニメーションが生み出され効果音とともにテーブルに広がる。例えば、この茶釜は何かと思って触ると、扇子を片手に狸が現われ茶釜に乗って踊る影絵が動き出す。昔話を短くまとめて紹介するものなので、昔話を知っている者でも、この小物ならば何の昔話が現われるだろうかと予想する楽しみがある。スポットライトに照らされた展示物を見ていると突然天狗の影が登場し、さっとどこかへ消えていく仕掛けもあった。

二つ目の仕掛けは、昔話の舞台、その主人公や展開を自分たちで選択できるコーナーだ。壁に大きな映像と、手元にタッチパネルのある一角で、例えば、桃太郎を舞台のベースに選ぶと、主人公は童でも姫でも選択でき、何なら河童も選択肢にいる。その後はお供を誰にするか、これまた従来のお供三匹以外に熊でも亀でも選べる。選択することで映像はやさしい語り口とともに展開する。この昔話の世界への引き込みようは見事で、まず正解のないストーリーである点、映像を囲んで見られるので、他の体験者と共に妙ちきりんな話を聞き楽しみの共有ができる点が特徴的であった。誰をお供につけたら強いかわ仮説を立て選択し、その昔話の結末をフィードバックする。多様性の尊重や考える力を育み、昔話に参加することでその魅力を再発見し、また新たな昔話を生み出す場があった。

3. 釜石市いのちをつなぐ未来館にて

釜石市いのちをつなぐ未来館は、震災の記憶・教訓の共有と防災学習のための施設である。1896年の明治三陸大津波、1933年の三陸大津波でも被災した釜石市鶴住居地区は、リアス海岸の地形により、2011年の東日本大震災で入り江の奥に高い津波がきた。施設のコーナーの一つに、「釜石の子どもたち」があり、ここで当時の鶴住居小学校と釜石東中学校の生徒が避難した出来事が伝えられていた。

地震発生時まだ学校にいた生徒たちは、手を繋いで学校から800m先に避難し、そこからさらに300m先の高台へ、さらに上へと避難した結果、高速道路まで逃げて町中の避難所へ行き、生き延びることができた。子どもたちが「さらに上へ」と避難できたのは、「てんでんこ」の教訓の浸透と防災教育の取り組みがあった。

「てんでんこ」とは、「それぞれに」「各自で」という意味の方言で、「津波が来たら、てんでんばらばらにそれぞれ逃げなさい」ということだ。「てんでんこ」の文字は施設内でよく見かけられ、「てんでんこ」の絵本や「てんでんこレンジャー」の顔出しパネルがあり、この教訓を伝承せんとしていた。

防災教育の資料の一つに、「下校時津波避難訓練」があった。地区ごとに時間差で下校し、途中で「地震発生」の訓練放送が流れたら、安全な場所で身をかがめ、ゆれがおさまるのを待つ。そして「津波警報」の放送が流れたら、その場所から一番近い避難場所はどこか考え、6年のリーダーの指示で避難する。最後に担当の先生から指導をもらい解散するまでの訓練だ。座学だけでなく、下校時を想定した避難行動をすることで、各々が自分の命を自分で守る準備を整えられるに違いない。

4. おわりに

東日本大震災に関する事前学習で、以前にも津波の被害があったこと、そしてITによる災害対応サービスについて学んだ。今回の研修を通して、災害下は勿論、災害後の記憶継承から来る災害に向けての防災情報の伝え方にもITが有効ではないかと考えた。

とおの物語の館は、語り部とIT技術によってより身近に昔話の世界を体感できる仕掛けを持っていた。釜石市いのちをつなぐ未来館は、過去の事実と教訓を伝えることで、防災意識に繋げ、子どもたち一人一人が防災を学び備える力を養成してきたことを伝えていた。昔話継承で得られるような体感を、教訓継承の体験にも転換できたらどうだろうか。語り部は文章以上の情報を伝えられる。下校時津波避難訓練を嚆矢として、IT技術による買い物中や移動中における避難訓練の体験ができるかもしれない。また、今回訪れた東日本大震災の伝承館を、遠く離れた地の小学校や中学校でも学べるかもしれない。

既にIT技術による防災学習は神戸で進められているようだ。釜石市いのちをつなぐ未来館には沢山の防災の資料があり、その中で「阪神淡路大震災記念 人と防災未来センター」のパンフレットを見つけた。VR映像や災害時の映像空間を体験することで楽しみながら防災知識を学び、自分で考え、判断し、行動できる力を養うことができる施設だそうだ。いかにして次世代に情報を伝えていけるかが、継承の要であり、これからも工夫しがいのあるところである。

今回の研修で私の防災意識は向上し、防災リュックを用意したが、まだ十分とはいえない。今後も起こりうる災害に備えて、ぜひ「人と防災未来センター」を体験し、その情報の伝え方共々学びたいと思う。

[参考文献]

- ・とおの物語の館パンフレット
- ・釜石市いのちをつなぐ未来館の方のお話
- ・東日本大震災津波伝承館いわて TSUNAMI メモリアルパンフレット
- ・人と防災未来センターパンフレット

東日本大地震の記憶と教訓

2部英米文化学科 1年 3022119 高野 魁人

1. はじめに

私たちは文化遺産や文学、そして東日本大震災について学ぶため、函館市から宮城県にかけて現地を訪れた。

私はこれまで、テレビやメディアなどで得た情報でしか被災地を見ることがなく今一つ実感を持つことが出来ず、真剣に考えたことは無かった。しかし、当事者の方の声を聴くと当時の地震・津波への対処、避難後の問題点など、現地でしか気付けない点があつた。そのため、本稿では主に東日本大震災について私たちが経験したこと、私の個人的な考えについて記していく。

2. 釜石市いのちをつなぐ未来館

私たちは2日目に岩手県へ移動し、釜石市いのちをつなぐ未来館を訪れた。この施設は釜石市周辺の被害や教訓を語り継ぐために建設された。この施設で説明を受けたので、いくつかの重要な話を挙げていく。この辺りには釜石市鶴住居地区防災センターという施設があつたが、その名称や避難訓練が行われていたことから避難場所として認識されていたことや、「ここまで津波が来たことは無かった」という考えを内陸部の人々が持っていたことにより、沿岸部よりも内陸部の方が被害が大きかった地域もあつたという話を聴いた。一方、学校で防災教育を受けたことで小学生や中学生の子供たちが震災の時、途中の避難場所で安心せず自分たちの判断でより高い避難場所を目指し、避難に成功した記録が残されているという説明も受けた。私はこれらの話から、思い込みの危うさ、予測を怠ることは大きな悲劇を生むことを学んだ。反対に、正しい知識を持つこと、常に最悪の場合を想定し、その想定でどう行動するかを常日頃意識さえすれば被害を最小限に抑えることが出来ることも学んだ。

この施設の周囲には慰霊碑や津波浸水高のモニュメントなどがあり、後世に残す活動が行われている。私はその中で一つ疑問を感じた。実は先述した釜石市鶴住居地区防災センターは既に取り壊されているため、跡地が記された碑しか見ることが出来ない。しかし、正面から反対側に位置しているため影が薄いと感じ、正面と比較して足を止める人が少ないのではないかと考えた。取り壊す理由として、遺族の方から家族が犠牲になった場所が残っているとつらいという意見があつたらしい。一方で、取り壊しが決定した後に別の遺族の方から中止してほしいと手紙が送られていた。どちらの意見が正しいかは私には分からないが、悲劇を後世に伝えるためには原爆ドームの様に残した方がいいと考えている。それに、取り壊すにしても碑だけでなく、いのちをつなぐ未来館に展示してある元の姿を写した写真が近くに無いと、訪問者は実感を得ることが難しいのではないかと考えている。

3. 陸前高田 奇跡の一本松

三日目になり、私たちは奇跡の一本松がある陸前高田市の高田松原津波復興祈念公園を訪れた。私たちはまず公園内に入り奇跡の一本松を目指した。震災前は約7万本の松の木が生い茂っていたそうだが、その面影は無かった。整えられた芝生が広がっており、元々何も無かったのではないかと疑うほど私は静けさと無を感じ、こうなる前の姿が忘れられるのではないかと考えた。その後、被災時の記録を残した施設、いわて TSUNAMI メモリアルに立ち寄った。ここには被害を受けた橋の一部や標識などが目の前にあり、その損傷の大きさが津波の破壊力を物語っていた。

4. 石巻・大震災まなびの案内

最終日には宮城県へ向かい、石巻市の石巻・大震災まなびの案内ではガイドの方の説明を受けながら石巻市を巡った。その最中、石巻南浜津波復興祈念公園を訪れた。この中にある、みやぎ東日本大震災津波伝承館では多数の震災の記録、被災者のメッセージ、復興の取り組みについての展示がされていた。公園内にある高台にはひとつの写真のパネルが設置されていて、その写真には家屋が広がり住宅地になっていた。しかし、現在は平らになり緑が広がっていたため、私はそれを見て、奇跡の一本松を訪れた時の様に、元の姿が忘れ去られてしまうのではないかという悲しみと、未来に向けて新しく大地が再生されていく喜びを感じた。この施設では幸いなことに震災前の写真が多数保存されているが、それらを失ってしまうと未来の人々の恐怖心、警戒心が薄れてしまうと考えている。

その後、日本三景のひとつである松島を訪れた後、北海道に帰るため仙台空港へ向かった。仙台空港にも津波到達ラインがあり、私たちの旅は最後まで震災の被害を目にすることになった。

5. おわりに

この文化遺産特別演習では情報を正しく持つことの重大さに気が付いた。東日本大震災から11年の年月が経ち、当時生まれていなかった子供たちが増え、この先震災の記憶が薄れていくかもしれない。過去に起きたことを過去のことにしないために、当時を知る私たちは子供たちに教訓を伝え続ける責任がある。そのためにも、私たち自身が関心を持ち続け正しい知識を追い求めなければならない。

文化遺産特別演習を通して

2部英米文化学科 3年 3020107 大西 菜月

はじめに

今回私は、岩手県や宮城県を中心に、事前発表で調べた東日本大震災の震災遺構や伝承館、世界遺産である奥州平泉など多くの場所を訪れた。コロナウイルスの影響により2年ほど現地での研修は中止になっていたが、今回実際に現地へ行ったことで新しい知見を広めることができ、さらに興味が深めることができた。

石巻南浜津波復興記念公園

宮城県石巻市は強い揺れと津波によって甚大な被害が発生し、1800世帯4500人が亡くなった国内最大の被害市町村で、その中でも高度経済成長期以降に住宅地として開発された南浜地区は500人以上の人が亡くなった、石巻市の中でも特に被災が大きい地区である。津波の襲来とその後が発生した火災の延焼の被害を受けた南浜地区はその後、国が場所を買い取り公園へと移行された。記念公園の場所は、10年前には建物が多く存在していたとは思えないほどに広く、それだけ大きな津波が来たのだなと肌で感じた。

みやぎ東日本大震災津波伝承館

記念公園の中で、私が特に印象に残ったのは、みやぎ東日本大震災津波伝承館である。この伝承館は、「かけがえのない命を守るために、未来へと記憶を届ける場」というコンセプトを持つ、東日本大震災による津波被害や教訓等を展示物・映像で知ることのできる建物で、建物の一番高い屋根の高さで南浜にきた津波の最大の高さ、6.9mを体感することができる。

被災された方の震災時から現在に至るまでの証言映像には、宮城県内の幅広い年齢の被災された方が、様々な立場・視点からインタビュー形式で思いを語っており、誰でも震災を身近に感じることができる。証言映像は体験談だけでなく、これから津波の被害者を出さないためにどうすればよいかなど様々な内容のものがあつた。中でも、「避難所は年数を立つと忘れられるが公園は何年たっても子どもも大人も覚えていられるため、避難所を公園にし、忘れない対策をすべきだ」という証言映像は、津波の被害が特に多い日本で多くの人が知るべきだと感じた。

平泉

岩手県は震災の被害を受けた場所だけでなく、平安時代後期に奥州平泉で藤原清衡を初代として、基衡・秀衡・泰衡の四代によって築かれた、平泉の歴史の地としても有名である。今回の研修では、1100年頃に清が建立した中尊寺、二代基衡の頃に県立された毛越寺、三代秀衡の頃に建立された無量光院の跡地など、終日平泉の遺跡群を見物し歴史を学ぶことができた。また、平泉の中尊寺の入り口の前に建てられた武蔵野坊弁慶の墓には、まだ新しい日本酒や花

のお供え物があり、そこからも当時の歴史は地元の人々の誇りであり、1000年たった今でも地元の人に愛されているのだと感じることができた。

毛越寺

毛越寺とは、毛越寺・中尊寺・立石寺・瑞巖寺の四つの寺院を開いた宗教家、慈覚大師が東北巡遊をしている際に深い霧のため進めなくなっていたところを、白鹿の毛に導かれ白髪の老人と出会い建立したことがきっかけとされている、不思議な言い伝えの残る寺院である。現在、創建時の建物は全て焼失し見ることはできないが、当時の堂宇・廻廊の基壇・礎石、土塁など庭園等の遺跡は今も良好な状態で遺されており、遺跡から当時の情景を想像することができた。また、復元整備された「大泉が池」を中心とする浄土庭園と、境内に植えられた沢山の花も美しく、私が訪れたときには毛越寺萩まつりが開催されていたため、枝いっぱい咲き誇る萩の花を見ることで、当時の人々が四季を楽しんでいた様子も体験することができた。

まとめ

今回の文化遺産特別演習を通して、東日本大震災の津波の証言映像や資料からは、私が考え付かなかった視点の内容のものが多くあり、震災について考えるきっかけになった。ガイドさんからは被害者への追悼の思いと津波から身を守るためには逃げる以外ないことを学び、実際に訪問したため被害の大きさを体感することができた。

また、2011年は東日本大震災の被害にあった年であると同時に、平泉の遺跡群が世界遺産登録された年でもあるため、中尊寺や毛越寺などの建物や、寺院や庭園の浄土思想に基づく理想世界の表現の素晴らしさが世界に広まっていくことを願うとともに、四寺回廊のうち今回訪れなかった立石寺と瑞巖寺を訪れ、毛越寺と中尊寺の2つを比較したいと思った。

令和4年度 文化遺産特別演習報告書 第2号

発行日 令和5(2023)年3月6日

発行 北海学園大学人文学部

印刷 株式会社アイワード

文化を学ぶ 世界と繋がる



北海学園大学人文学部

日本文化学科(1部・2部) / 英米文化学科(1部・2部)

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL.011-841-1161(代表) FAX.011-824-7729

URL <https://human.hgu.jp/>